
俺はクールな転生者

アセット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺はクールな転生者

【Nコード】

N8555Z

【作者名】

アセット

【あらすじ】

俺の名前は神崎 直人。ごく普通の高校生だった。あの異形に出会うまでは……異形は「仕事」と言っただけ俺を異世界へと送る。

特別な力と共に。神？そんなものは知らないさ。非日常はもうたくさんだ。俺はここで気ままに生きていこう。非日常な世界で日常を目指すお話。

少年はクールでは無く面倒くさがり屋なだけだったー

主人公最強チートオリ主異世界トリップ小説にしたいです。頑張り
ます。

プロローグ(前書き)

ハジマリ。

プロローグ

俺はいつもと同じ生活サイクルの牢獄から抜け出したいと考えているごく普通の高校生。名前は神崎 直人。ありふれた名前だ。

学校に通い、習い事や部活を頑張るなんてもう面倒だ……………

いや、面倒というのは少し違う気がする。正確には、飽きた。

毎日、同じことの繰り返し。流石に堪えてきた。

俺はそんなに非日常？というものを体験したいっ！というような性格ではないが、年は高校生。いつもと違う刺激くらいは欲しかった。

言うならば、料理のスパイスほどの刺激。この例えがわかり辛いのなら、そうだな……………寿司に付き物のわさびみたいなもの。

そんな刺激を求めている。

「くだらない。そんな刺激が俺の元にくる筈がないか。俺は平凡な没個性な人間だからな」

何を考えていたんだか。今日の俺は少しおかしいな。学校の帰り道の冬の寒さに頭でもやられたかな？

「今日は気分転換にいつもと違う道でも歩こうかな」と

俺は雪が溶けて出来た水溜りをまたぎながら呟く。今年は寒いなあ。

しかし、なんだか今日は家に帰りたくないなあ。何なんだ？この気持ち。

俺の心が非日常でも求めてんのかな。それはあるかも。少しの刺激なら大歓迎だ。

この世の中はつまらない。俺の身には余る。
この世界は俺にとってはどこまでも退屈だった。

「なら、このつまらない世界から開放してあげましようか？」

「！」

不意に。後ろから。怪しげな男の声が聞こえた。俺の背筋が凍りつく。俺は蛇に睨まれたカエルのように動けない。

「どうしたんですか？体が強張っていますよ
？せっかく今、貴方は非日常に巡り会えたというのに」

何だ？何を言っている？後ろにいる男は自分の存在自体が非日常とでもいいたいのだろうか？しかし、馬鹿には出来ない。後ろにいる男からは、何か得体のしれないものを感じるからだ。

俺の全神経が警鐘を鳴らす。この男と関わってはいけないと。いや、もはや後ろにいる「モノ」が俺には男かなんてわからない。先入観で決めていただけだ。とにかく、後ろの異形から逃げなければならぬと俺はこの時、強く思った。

俺は右足に力を入れる。しかし、金縛りにあつたように動かない。

「う、動け！」

だが、俺の右足は動かない。俺の意思に叛くかのように動いてくれない。

「何故、私から逃げるのですか？非日常を望んだのは貴方なのに」

後ろの「モノ」が俺に問いかける。感情を感じさせない、無機質な声。

俺は「モノ」に初めてまともに言葉を返す。

「俺は確かに少しくらい非日常を望んだかもしれないが、アンタは過分なんだよ！」

そう過分なのだ。非日常の取り過ぎ。非日常と日常のバランスが崩れてしまうほどの非日常など俺は求めていない。だが、後ろの「モノ」と関わると、絶対に俺はイントウザ非日常を遂げてしまう気がする。

だから、俺は逃げる。この不気味な「モノ」から。

「何が過分なのかはわかりませんが、私は貴方を送り届けるよう上から言われているのでそれをこなすだけです」

後ろがざわめく。冬のある小道の一角が暗くなる。後ろの異形が不意に俺の腕を掴む。

「っ！離せ！」

「無理です。仕事ですのぞ」

異形が丁寧な話す。仕事？なんの事なんだろうか？

「貴方には異世界に行つてある事を成し遂げてもらいます」

いせ．．．異世界！？

「異世界だと？頭でもおかしくなつたか？」

もしかしたら後ろの異形はただの頭のイかれた電波君かもしれない。そもそも後ろの「モノ」は異形でも何でもないのであるかもしれない。

ただの不審者かも知れない。そんな観測が俺の頭をよぎる。

「おかしくなつていません。とにかく私はただ上の任務を遂行するだけ．．．」

俺は、決めた。後ろを振り向こうと。後ろの奴が不審者だった場合後ろを長時間隙だらけにするのは得策ではない。

一、二、三で振り向こう。最初は後ろの奴の雰囲気な呑まれっぱなしだったが、案外対した事のないただの不審者かもしれない。

不審者な対した事のない問題と言えるあたり俺は後ろの異形に相当臆していたんだと思うんだ。

じゃあ、やるとしよつ。

一、

二、

三！

俺は後ろを振り向く。その瞬間、俺は異形の顔を見て体が固まった。

ああ。間違いない。俺は確実に今、非日常イベントに巻き込まれている。

後ろの異形の目が三個あったからだ。

後ろの異形の顔が皮肉げに歪む。

「選ばれた少年ご案内」

後ろの異形が俺の腕を思いつきり引つ張る。

「あ、そうそう。上から貴方に力を譲渡するようにといわれていたんです」

力．．．？

異形の腕？から俺に力が送られる。何だか暖かい。少なくとも俺に悪影響を及ぼすものではないみたいだ。

いや、逆に体が軽く感じる。

「おい。お前……俺に何をした？」

「それは、おいおいわかるでしょう。貴方の目的と、共にね」

異形が異次元の割れ目？みたいなモノを作った。

「何だ……それは……本当にお前は……」

「では、今度こそご案内させていただきます」

「神に選ばれた少年お一人様ご案内〜！」

異形がさっきまでとは違う軽快な口ぶりで言った。

俺は異形に押され、意識ごと異次元の渦にもってかれてしまった。

プロローグ(後書き)

ツツク

おい、財布は返せよ。頼むから。十円あげるから。そつだ！今……俺……

長っ！サブタイトル。

おい、財布は返せよ。頼むから。十円あげるから。そつだ！今……俺……

俺は気がついたら草の上に仰向けで倒れていた。辺りの景色はRPGの序盤で立ち寄るような森だった。美しい木々が風で揺らめいて俺にこの場所が森だとはつきり分からせてくれる。

俺、何時の間にこんなところへ来てたんだ？

ん……そういえば、さっきまで俺は何を……

あ！

帰りの途中で俺は三つの目を持つ異形に何かされたんだつた。確か、異形は俺を異世界に送るとか何とかめかしていたが……

ここって異世界なのか？この森が？

まさか。ありえない。どうせ自然公園かなんかってオチだろ。

あの三つ目の異形も俺が非日常を求めるばかりに現れた悲しい幻覚。そう考えるのが一番しっくりくる。たしかに俺自身は次元が裂けるのを見たり、三つ目の異形を見たのを自覚しているが……

それでも、異世界のことは信じられない。ここが？異世界？馬鹿な。そんなことはありえない。さっさとこの自然公園から出て家に帰ろう。

ていうか、誰だよ。あんな三つ目の異形のセットまで持ち出して俺に壮大な悪戯を仕掛けたのは。しかも、通学路から自然公園みたい

なところまで拉致るって……

恨まれてんのかなあ。普通に過ごしてきた筈なのに。鬱だ。

しかしこの自然公園、俺が住んでる近郊にこんなに緑が豊富な場所あつたか？

いや、ないな。大分遠くまで拉致られたか。よく見れば周りも草や木々がちゃんと整備されていない。生えっぱなしだぜって感じた。

うん。ここは、公園の類では無いみたいだ。草が整備されて無いし。俺は結構都会に住んでいるんだが、こんな緑がきれいな場所がまだ都会にあつたとは驚きだ。

この悪質な悪戯を忘れた頃にまた来ようかな。何だかんだ言つて緑には癒される。そういうえば、今気づいたが俺の学生カバンが無い。

財布入ってたのに……まさか悪戯したやつにパクられた？おい。普通に犯罪の香りがするんだが。荷物荒らされた。最悪だ。

まあ、携帯はポケットにいつも入れてるから携帯はパクられてはいない様だ。

良かった。今、辺りは朝。俺が異形（もはや俺の中では変態不審者）に絡まれたのが夕方だから、一夜明けてしまったことになる。親が警察に連絡をいれてもおかしくないレベルになつてしまった。

一応、俺は無事ですよ〜と連絡を入れておくか。

しかし、さつきから携帯の電波が圏外なんだが。ここ外だぞ？トネルもないし。バリ三だろ？普通。神崎 直人の常識が短時間になり崩されているんだがどうしてくれるんだ。

まったく。不審者にはタイホというきつい罰を受けて貰わないと気が済まないな。

はあ。携帯は使えないか。タクシーでも呼んで早く、家に帰ろうとしたんだが・・・ま、こんな森では車も入ってこれないか。

しかし、こうなると徒歩で家にご帰宅しなければならぬのか。俺は千葉に住んでいる訳だが、千葉にはこんな景色無いし・・・まさか圏外か？

圏外で圏外

すいませんでした。さて、どうするか。まあ、しばらく歩くか。とりあえず進めば何か分かるかもしれないしな。

意外と五分くらい歩けば、見慣れた景色にもどるかも。もしそうだったら僥倖だ。

まあ、教科書とか財布とかはどっかに吹っ飛んだけど・・・鬱だ・・・明日からどうしよう・・・

そういえば、さつきから複数の視線を感じるんだよなあ。背中がムズムズする感じ。「誰か」に見られている感じだ。いや、「誰か」というよりは・・・もつとこう・・・何だ・・・その・・・あれだよ！あれ！そう！犬に見られてる感じ！

そんな視線を感じている。野良犬か？まったく。場所が場所だけに動物も野性的になるのか？自然は動物を開放的にさせるし。

襲われたら、最悪だし走るか。自衛できないし。怖いし。野良犬なら少し走れば、まけるだろう。まさか、某ダメダメ少年のように延々と追いかけられる訳あるまい。

「ふう．．．．ヨードン！！」

俺は走る。割と気楽な気持ちで。俺が走り出した瞬間、後ろの木々が揺れる。やっぱり何かにマークされてたみたいだ。

俺は後ろを振り向く。だって何に追われているくらい見たいだろ？

そしたら、信じられないものが俺の虹彩に映ってしまった。

俺を追っかけていたのは．．．地球では絶滅した筈の所謂狼いわゆるだったからだ。

「は？まじで？」

こうして、俺と狼？のデス・チエイヌが始まる。

おい、財布は返せよ。頼むから。十円あげるから。そつだ！今……俺……

現状把握はいるよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8555z/>

俺はクールな転生者

2011年12月28日23時54分発行